

街道の駅からの小さな旅

てくてくてくてくて

甲斐のくに

第4駅 市川本町

笛吹川を越えた辺りから、車窓の風景が一変
山々は近く、ローカル線の風情が色濃くなった。
山からの風がそよぐ静かな里・市川は
かつて紙屋のまちとして栄えていたという。
そんな面影が残っている中央通りをてくてくと…。



06



旧二葉屋酒造

かつて多くあつた酒造の一つ。蔵や古民家が点在する中央通りの代表的建物。人気銘柄だった栴檀（せんだん）の木が植えられている。

07



柿の木の辻

柿の木と屋敷神、清らかな水路の流れ。和紙作りが盛んな市川らしい風景に憩える一角。

08



太田屋和菓子店

大塚にんじんや桑の葉などの特産品で作った和菓子が並ぶ。粒あんをモチモチの皮と笹の葉で包んだ季節限定、駄まんじゅうも絶品。

01

宝寿院



夢窓国師による庭園や、樹齢約200年のしだれ桜、甲斐の名鐘の鐘楼など見どころが多く展望もよい。

02

熊野神社



甲斐源氏の祖・源義清が守護神を祭り、後に平塩の諸神を祭つたと伝わる。本殿壁面の彫刻は見事なもの。

03

甲斐源氏旧趾



甲斐源氏の祖・源義清が館を構えたと伝わる平塩の岡。甲府盆地や南アルプスまで見晴らせる。

04

市川陣屋跡



巨摩、八代郡を支配するため明和2年に設置された市川陣屋(代官所)。現在では御門だけ残され往時の隆盛ぶりをしのばせている。

05

市川教会



明治30年建築。玄関妻壁の意匠が特徴的。しつくしい仕上げの独特の外観は、中央通りの中心的存在。国の登録有形文化財。

てくてく
歩きの
途中で...



“今昔通り”とも呼ばれる町のメインストリート・中央通りでお散歩中のお母さんが、「昔は、あっちの源流からいっぱい水が流れてきたんだよ」と教えてくれました。栄華の時代を通り過ぎてきた町では、大きな礎の上にある穏やかな“今”を感じることができました。

“紙漉き唄”の調べには 市川和紙の奥深さが漂う

市川といえば、20万人もの観客を集める「神明の花火」しんめいで有名です。その神明の名が物語るのは、花火より以前、甲斐源氏の時代から千年を誇る和紙生産地としての歴史。かつて武田信玄、徳川家康をも魅了したという、市川和紙の往時の輝きを知りたいと、紙の神様を祭る「神明社」を訪ねたところ、市川紙づくり唄保存会の加賀美文子さんに会うことができました。

「文化の豊かな市川では、昔は『市川の百祭り』といわれるくらいお祭りが数多くありました。『神明社』では今でも、毎年7月のお祭りに『市川紙漉き唄』『市川楮打ち唄』が奉納されています。楮は紙の原料となる植物のコウゾのこと。歌詞を読むと、市川和紙が昔はどんなふう盛んだったか、分かってもらえると思います。『紙漉きはいやだよ』と始まって、でも5番では

『御用御用でお江戸まで』と、うたうんです。大変厳しい思いをしながら、肌吉と称された肌のように柔らかな和紙を漉いて、御用紙として献上していた。そんな、昔の人たちの気骨や誇りが込められているように、市川に生まれた者として、三味線を弾いていると、胸にこみ上げてくるものがあります」

「市川紙漉き唄」

紙漉きやいやで 家うちを出て くされ縁 また行く先も紙漉き
いやだらいやと 初手しよてに言え 繻子しよこの帯買わせておいていやとは
頼みまずぞよ 紙漉きさんよ ふくれふくれの ない紙を
私わたししや行きたや 紙漉きさんと 甲州市川 見て来たい
漉いた肌吉 送る時や 御用御用で お江戸まで





紙漉き唄の伝承者として、三味線を担当する加賀美文子さん(写真左)

[千年を誇る和紙文化を伝える神明社]

神明社の起源は、甲斐源氏の祖・源義清の家臣で、この地に紙を漉く技術をもたらした紙職人の甚左衛門を「紙明社」に祭ったことと伝わり、江戸時代に「神明社」となった。『神明の花火』は、甚左衛門の命日にあたる神社のお祭りの日にたくさんの花火を上げていたのが前身だという。